

アメリカのカリキュラム改革における多文化教育批判の位置づけ：ニューヨーク州社会科カリキュラム論争を手がかりに

川上, 具美
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：博士課程2年

<https://doi.org/10.15017/7374740>

出版情報：国際教育文化研究. 6, pp.81-92, 2006-06-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



アメリカのカリキュラム改革における多文化教育批判の位置づけ

——ニューヨーク州社会科カリキュラム論争を手がかりに——

川上 具美

本論は、現在アメリカで行われている多文化教育への批判を位置づけるために、アメリカのカリキュラム改革の流れをたどる。この中で、改革を「進歩主義」の革新的な改革と、「伝統主義」の政府主導型の改革による揺り戻しによって特徴づける。この流れに加え、本論では1960年代を社会への視座がモダニズムからポストモダニズムへと転換を始めた起点であると措定し、これ以前までを学校カリキュラムの形成発展期、これ以降を学校カリキュラムの変動期と捉える。その上で、1990年代のナショナル・スタンダードを中心とする教育改革は、カリキュラムの「統合化」という点でモダニズムの観点と、多文化教育のスタンダードへの関わることは「多文化化」というポストモダニズムの観点を並存させたものであることを論じる。その際、モダニズムとポストモダニズムとが並存する矛盾を、多文化主義批判の考察を通じて明確化する。

1. カリキュラム改革の流れ——1890年～1980年代まで——

カリキュラム開発の出発点は1890年代であると考えられているⁱ。それから1930年代に至る過程において、この後の学校教育を支える思想が形成されていく。この時期に展開されたカリキュラムにかかわる諸言説は、佐藤学は以下の四つに集約している。産業効率や科学の思想を背景とし学習作業やその評価に製造メタファーを導入したボビットやチャーターズらの「社会効率主義ⁱⁱ」、子どもの解放と経験、思考、表現の拡大を求めたデューイやパーカーらの「子ども中心主義ⁱⁱⁱ」、キルパトリックやカウンツらに代表され批判的思考の育成を追求した「社会改造主義^{iv}」、最後に1930年代のニューディール政策を背景として生まれ第二次大戦後に広く普及した、社会的・道徳的態度の形成を目的とするキャズウェルやホプキンスらの「社会適応主義^v」の四つである(佐藤学,1990p7;1996,pp7-13)。

「子ども中心主義」や「改造主義」の視点は、市民的態度の育成という点で進歩主義的なものであり、逆に「社会効率主義」や「適応主義」は教育方法や内容が伝統主義的なものであり、視点は子どもの側にではなく社会の側にある。

「社会改造主義」の教育の後、アメリカのカリキュラム改革は、1957年のスプートニク・ショックの影響を受け「新カリキュラム運動」へと進んでいく。この運動の中では、子どもたちに科学的知識や態度を育成することが急務とされ、全体的な教育水準の向上を図るためどの教

師にとっても有効な教材パッケージの開発や、行動科学に基づいた数量的客観的評価の研究が行われ、教育における伝統主義者の性格を強く有することになった。

しかし、この運動は、1960年代に入る頃から批判に晒され、見直しの作業が始められる。シルバーマン（Silberman, Charles E）はこの改革失敗の原因を、「科目を最も重要視し「傑作」を作り出すことに全力を注ぎ、各生徒の必要などはほとんど無視してしまった」ことにあり、その背景に、当時の「改革者たちが大学の学者で、公立の学校や大学の教育学部とあまり接触が無かった」ことや、「以前のカリキュラム改革を研究しなかった」こと、「教室や学校全体の厳しい現実を無視しがち」（Silberman, 1970＝山本訳『教室の危機』,p202）であったと述べている。シルバーマンが指摘する「教育現場と接触の無い教育改革者」の存在は、カリキュラム改革が教育現場の現状に合わせるのではなく、上意下達の形をとって推進されたことを示している。つまり、「新カリキュラム運動」は、ボビットやチャーターズら社会効率主義の思想に基づくものであったことがわかる。「新カリキュラム運動」が失敗した原因を佐藤は、改革が社会の抱える貧困や不平等性といった問題に対処する「^{レリバン}ス」に欠けていたと述べている（佐藤学,1996,p216）。

その後、1960年代半ばから1970年代にかけて行われたカリキュラム改革には、「^{レリバン}ス」を求めた次の3つの視点を取り入れられた。「人種差別・貧困・麻薬・環境問題などの現実的な問題」、「貧困地域や黒人居住域を中心に子ども中心主義の学校を建設する運動」、「バイリンガル教育の普及・能力別学級編成の拡大・LD(学習障害)児などに対する補償教育プログラムの拡充」（佐藤学,1996,p216）である。「^{レリバン}ス」を重視するこのカリキュラム改革は様々な問題をもった子どもに目を向けた、進歩主義的かつ多文化的なカリキュラムであった。そのため^{レリバン}ス運動は能力別学級編成の拡大やエスニック・スタディーズなど選択科目の増加を促した。

これに対して、カリキュラムの統合性と学校の共同性を解体して、基礎学力を低下させるものであると批判する声が新保守派層から持ち上がった。反動ともいえる「^{リテラ}シ能力」教育への方向転換は、日本の経済力の脅威、さらにその教育水準に注目した1983年の報告書「危機に立つ国家－教育改革への至上命令－」viに端を発する。日本の教育をモデルとした中央集権的な改革は、ナショナル・スタンダードの作成や統一テストの開始といった学校や教師の反応をも生み出していった。またもやここで伝統主義的なカリキュラムが見直されることになるのである。

以上アメリカにおけるカリキュラムの流れから、伝統主義的な学校体制と、進歩主義的な教育思想とが交互に登場していることがわかる。その進歩主義的なカリキュラムは、その内容や方法が学校や教師によって多様化する運命をもつ。そして一旦、産業や科学において停滞が起こればその原因を教育にもとめ（多くの場合は能力低下・科目内容の希薄化）、上からの教育改革が伝統主義的な学校体制に回帰することを目的に行われるのである。

次に、1960年代に現れたポストモダンの言説と、それがもたらしたカリキュラムへの影響について論じる。

2. ポストモダニズムによる学校批判——60年代——

1960年代のアメリカは、ニューレフトの登場、学生運動の高まり、黒人音楽を源流とする音楽の流行、反抗的若者文化の動きが高まり、といったことに代表される (Gitlin, 1987)。既存の社会や文化に対し、各分野で見直す動きが始まった時代といえる。中でも、黒人の差別的地位にかんしては、南部におけるバスボイコット事件や公民権運動を通じて、その不平等性が国内外で認識され、これを問題視して改善するために、アメリカの社会・学校を対象とした調査分析が行われるようになった。

それが、1930年から50年にかけて行われたクラーク夫妻 (Kenneth & Mamie Clark, 1939, 1950) のアフリカ系アメリカ人幼児への調査であり、黒人と白人の教育的不平等性を調査したコールマン (Coleman, James) による報告^{vii}であった。カラベルやハルゼー (Karabel & Halsey) は、コールマン報告が、学校の内部的な作用や「家族的背景」の諸要因に関するデータをさまざまな角度から集めなければならないという難解さと、結局のところ不平等を説明できなかった点で調査の限界を示したと述べている (Karabel, Jerome & Halsey A. H., 1977; Bowles, Samuel & Gintis, Herbert, 1976)。

このコールマン報告は、教育研究者や社会学者を机上のカリキュラム分析から教育現場へと旅立たせ、子どもたちの家庭的背景や教師の子どもたちへの期待といった心理的背景にまでその調査対象を拡大させることになった。その中で、ボウルズ (Bowls) は、アメリカの近代教育が果たしてきた不平等の再生産を、家計の所得水準と大学在学率、そして親の学歴・所得水準と子どもの在学率との比較から明らかにし (Bowles, Samuel, 1971)、バーンスタイン (Bernstein) は家庭的背景に注目し、家庭内で使われる言語コードを労働者と中産階級に分け、学校文化が後者の文化に適したものであることを論証した (Bernstein, Basil, 1973)。

主に社会学の研究成果に基づく教育研究や調査分析は、学校教育の階級や人種間の不平等を再生産させる機能を明らかにし、モダニズム的性格のカリキュラム^{viii}はもとより学校そのものをも批判の対象とした。佐藤によれば、カリキュラム研究がこれを機に「行動科学の心理学と技術学の枠組みから脱して、社会学と政治学を基礎とする領域へとシフト (佐藤学, 1996, p14)」し、「教室に生起する教師と子どもの経験の文化的、政治的、倫理的意味を問う (佐藤学, 1996, p15)」ことが主となって、その課題は教育学的目標を語ることはなくなったという。つまり、ポストモダニズムの言説によって、絶えず学校・教師・カリキュラムはその認識や信念を批評される対象となり、確定的な方法や目的は失われたのである^{ix}。

1960年代は「新カリキュラム運動」から「レリバンス」運動へと転換した時期である。ポストモダニズムの批判^xを受け、レリバンス運動や後のナショナル・スタンダードやカリキュラム作成においては、多文化教育がしきりと提唱されるようになったのもこの時期であった。モダニズム的性格のカリキュラムや教育期待が強く残るままの学校教育において、多元的価値の育成や多文化教育の導入は論争を生み出さないではいられなかった。

次に、その論争の妥協点をニューヨーク州社会科カリキュラム改訂とその改訂の動きから探求する。

3. ニューヨーク州における社会科カリキュラム論争

ポストモダニズムの学校批判は、学校の機能・役割がいかに国家主導型であり、特定の文化集団による支配を強く受けていたことを暴露するものであった。こうした学校の機能や役割と、多文化的な内容を折衷させたカリキュラムの創造は困難な作業となった。そのことはナショナル・スタンダードやカリキュラムにおける多文化主義論争に如実に示されている。

ワシントンにあるスミソニアン・アメリカ史博物館に行くと日系移民の展示コーナーがある。強制収容所内での生活の様子を復元したものや、兵隊として志願する日系人の写真、その当時の手紙などを見ることができる。ほんの数十年前まで、米国政府が国民に隠し続けた出来事である。しかし、ここでアメリカ人としての意識を持ったまま彼らが差別されてきた実態をあらわにし、彼らのアメリカ人としてのアイデンティティを認めようとしなかった当時の政府の行いを反省するものだった。このことは、ナショナル・アイデンティティの性格が転換したことを意味している。1960年代の公民権運動を経て繰り広げられた黒人解放運動や先住民族の誇りの復権、非白人の移民増加が、WASP 中心のアメリカ人像の転換を迫ったのである。アメリカのナショナル・アイデンティティは、もはや多様な価値や文化を認める形で再構築される必要があったのである。森茂岳雄は、日系人と戦後補償について、「日系人以外のアメリカ人にとっても、アメリカが強制収容という戦時中の不正義に対して、謝罪と補償という民主的な方法で対応したことを知ることによって、アメリカ人としてのナショナル・アイデンティティを確認することにもなった」（森茂,1999a,p31）と述べている。

しかし、多様性を認めるナショナル・アイデンティティを具現化する教育の場では、このような動きはスムーズにはいかなかった。カリキュラムにおいて、文化集団がどう記述されその文化の政治的な位置取りが問題になったのである。

森茂は、1987年のニューヨーク州社会科カリキュラムと1990年のカリキュラム改訂に注目し、社会科における多文化教育のゆくえと、国民統合のためのナショナル・アイデンティティについて分析を行っている。そこでは、1987年作成のカリキュラムについて「ニューヨーク市立大学教授のレナード・ジェフリースが指導的立場にあったことでアフリカ中心主義の考え方が色濃く反映されているものだった（森茂,1996,p16）」とした。これは、その後行われた1990年のカリキュラム改訂の中心人物となったシュレジンガーJr. (Schlesinger Jr.) により行われた批判と多文化主義の方向修正にかかわるものである。

シュレジンガーJr.は、この報告書が「ヨーロッパ中心の偏りが少数民族の子どもたちの精神状態をだめにしていているという主張については、何の証明もしていない。私が見出しえたかぎりでは、民族研究プログラムと民族集団の自尊心とのあいだには、両者の相関関係を示すような科学研究は何もない (Schlesinger Jr.,1992,p108-109)」と主張する。また、1987年の社会科カリキュラム内容において大きく取り上げられている「ホーデノソーニー政治体制」について、その無意味性を「功業をいたずらに賛美したものである (Schlesinger Jr., 1991, p120)」と指摘した。彼は、各民族の誇りと自尊心によって歴史の教科書が書かれることは、それぞれの集団にとっての汚点を隠す歴史教育となるだろうと唱えるラヴィッチ (Ravitch) ら言葉を借り、1987年のカリキュラムにおける歴史観を痛烈に批判した。

1990 年のカリキュラム改訂では、歴史学者シュレジンガーJr.が出した批判が強く影響しカリキュラムの修正が行われた。彼は「民族的ないしは人種的な誇りを教えることが、いったい学校の機能なのであろうか。相違点に固守することは、全体を包み込むアメリカ国民性の理念をおびやかすことになるのではないか (Schlesinger Jr., 1991,p90)」と力説している。このように、シュレジンガーJr. が何よりも危機感を持って語ることは、アメリカ人という理念の喪失である (Schlesinger, 1991, p121)。その上で、シュレジンガーJr.は、クレヴキョール、トクヴィル、エマーソン、ミュルダールといった人々の言葉を借り、彼らの捉える共通の理想への傾倒、つまり「全ての人間の基本的な尊厳と平等の理想であり、自由と正義と機会への絶対的権利の理想」を基本理念として国民の統合を重要視するよう訴える (Schlesinger, 1991, p21,p149)。さらに、「ヨーロッパの特定の犯罪が何であつたにせよ、あの大陸は同時にまた、我われのもっとも貴重な遺産を構成し世界の大半が今日あこがれている個人の自由、政治的民主主義、法治の原則、人権、そして文化的自由といった解放思想の源泉—独特の源泉—なのである」とアメリカの統合理念の源泉としてヨーロッパ思想を称揚する。

アフリカ中心主義主導の多文化教育から、国家理念の喪失を警告し、新たな国民統合の理念を民主主義という政治思想に求め、その土台である西欧的価値観の重要性を喚起するシュレジンガーJr.の問いかけは大きな論争を呼び、多文化教育者の考えにも影響を与えた。多文化教育論の第一人者でもあるバンクス (Banks) も影響を受けた一人である。彼はその後多文化教育のあり方を提示したが、その内容はシュレジンガーJr.の多文化教育批判を暗黙裡に受け入れるものであつた。バンクス (Banks) によると、多文化教育の特徴は以下の4点に集約される。

第一に、西洋伝統主義者と多文化主義者の両者が非白人の割合が増え続けているアメリカ社会の「現実を直視する」こと。第二に、西洋文明を作ってきた人々が主人公として描かれ歴史の作り手として認識されてきた「神話を作り変える」必要があること。第三に、多文化教育が、人間の尊厳、平等、自由といった西洋的理想によって導かれていることに言及し、「西洋的原理によって作られた民主主義の理想が、全てのものを対象に実現するような国民国家を作り上げる」こと。第四点は、幼年期の社会化を通じて養われている集団による文化的規定からの「自由を目指す教育」である (Banks,1994＝平沢安政訳,p9-16)。

第三の、新しい民主主義的「国民国家」の考えを除いて、これまで学校や社会において認められてこなかった非白人・女性など周辺にいた人々を認識するという点は、これまでの教育が単一の価値観に支配されていたことを批判したポストモダニズムの言説を受け入れたものといえる。第三の視点は、西洋近代思想を中心に据えたアメリカ文化が、多様な文化を持った人々を承認するという位置取りを示すものでもある。カリキュラム論争の中でポストモダニズムの言説からおこった多文化主義思想は、カリキュラム論争の中で西欧的思想による国民統合という妥協点を見いだしているのである。

では、多文化教育の目標である多元的価値認識の育成は、こうした国民統合というモダニズムのカリキュラムとの妥協の中ではかられるのであろうか。シュレジンガーJr.の多文化教育への考察をまとめ、多元的価値が西欧的価値とすりかえられていく過程を検証する。

4. アメリカン・アイデンティティによる国民統合への回帰

桐谷正信は、先のカリキュラム改訂におけるシュレジンガーJr.の主張について、これはヨーロッパ的価値の復権であるとし、アメリカ人のナショナル・アイデンティティ創出の問題が議論されたと述べる（桐谷,1999,p9-10）。ニューヨークの社会科カリキュラム改訂をめぐる論争の中で、憲法理念や西洋思想と合致する国民統合の理念を重視することは、1960年代の公民権運動に端を発するカリキュラムの多文化化に歯止めをかけ、カリキュラムの統合化へ回帰する一つの分岐点になった。桐谷も、ニューヨーク州の社会科フレームワークが再改訂される過程において、「多様性」尊重から「多様性」と「統一性」の両者の尊重へと価値転換されたとした上で、その「統一性」は合衆国憲法、権利章典、独立宣言の民主主義思想に基づいたアメリカン・アイデンティティによって示されたと分析している（桐谷,1999,p8）。

しかし、カリキュラムにおいて、合衆国憲法や権利章典などの理念や民主主義思想を起用することは、目新しいことではない。逆にそれはアメリカ公教育の目標、愛国心の育成の中で使い古されてきた思想である。森田尚人は、アメリカ公教育の特質として、愛国心教育と公民教育とが同一視されてきたことを次のように考察している。

アメリカは共通の歴史的伝統を持たずに国民的統一を達成しなけりばならなかつたため、複雑な人種と多様な地域を統合する絆となつたのは、人権宣言と憲法に述べられた「自由」の観念であつた。その手段として「早くから発達した学校教育は、自由主義を唯一のアメリカ的価値として教え込むことによって、国民的統一意識の創出に携わつてきた」。こうした自由主義の用いられ方が、ナショナリズムのシンボルとなり、「自由主義に対抗原理を持たない唯一のイデオロギーとして絶対化され、「自由の専制」とも言うべき事態を引き起こし」、結果として、目標とされた「よい市民の形成」とは、「人種・出身階層にかかわりなく、アメリカ体制に信従する国民をつくることにほかならなかつた」（森田,1979,p303-304）。

シュレジンガーJr.の唱えるアメリカン・アイデンティティは、森田の述べた「自由」の観念を持つものとはほぼ同義であり、従来の愛国心教育で使用されてきた思想が再び用いられたことを意味する。アメリカ建国時のナショナリズムは、自由の観念を持ったアメリカ人への同化を建国の父祖であるワシントンやジェファークソンといった人々へも信奉させ、アメリカ人としての言語や文化・歴史は WASP 文化への同化も含むものであつた。このことは、イタリア系移民であるレオナルド・コヴェロ氏の追想を研究した山田史郎の研究によく表されているxi（山田,1982）。アイルランド移民に関しても、1890年から1920年における教育委員会制度の成立において、その改革者の教育哲学が、「他集団に優越するアメリカ生まれの…ヤンキー・プロテスタントの理念を移民や貧民の子どもに画一的に注入することこそ、学校教育の使命（堀,1976,p27）」であつたことから、長い間 WASP 的アメリカ人への同化が行われていたことがわかる。

シュレジンガーJr.の唱える「アメリカ国民性の理念」中心の社会科カリキュラム観は、建国当時の人びとの思想に焦点をあて民主主義の概念を教育する市民性育成のための教育と考えることもできる。しかし、その結果 WASP 中心のアメリカン・アイデンティティが強調され、そ

のアイデンティティをもとに国民統合教育が行われることを意味している。そうであるならば、これは、子どもたちの多様性に準じた教育ではなく、子どもを社会に適応させようとする伝統主義的教育への回帰と考えることができる。実際に、スタンダード策定におよび学力の向上を理由に行われているテスト (Standardized Test) など、そのカリキュラム観や教育方法は伝統主義の特徴を備えるものである。

5. 現在のカリキュラム改革の位置づけ

ニューヨークでの社会科カリキュラム(シラバス)をめぐる論争から4年後、National Center for History in the Schools から『合衆国史ナショナル・スタンダード』(National Standard for United States History: Exploring the American Experience) が発行された。このスタンダードの内容をめぐってもニューヨーク州の多文化主義論争と同じような論争が行われ、発行から2年後には改訂版が出されるにいたっている。

森田真樹は、『合衆国史ナショナル・スタンダード』1994年版と改訂版である1996年版に着目し比較分析を行い、「従来の歴史教育において軽視されてきたアフリカ系アメリカ人、アメリカ先住民などのマイノリティや女性を強調した社会史的、文化史的内容が多く組み込まれている」学習事例を取り上げ、後にこれが議論の的となり、1996年改訂版(歴史科スタンダードのみ発行)からは「学習事例」が省かれた経緯を提示している(森田真樹,1997,p46)。

1994年版合衆国スタンダードをめぐる批判は、当時の新聞やテレビといったメディアの論調を見ても明らかである。1994年10月のスタンダード発行と同時に Wall Street Journal (Oct. 20, 1994) は「歴史の終わり」という見出しをかかげ、スタンダードが「不正確でバイアスのかかったもの」と論じ、以後の長い論争の口火を切った。具体的には、ライト兄弟、ポール・リヴィア^{xii}、エジソン、ワシントンといった人物や合衆国憲法、権利章典といった項目の不足を指摘し、一方でマッカーシー議員、クー・クラックス・クラン、タブマン^{xiii}といった人物やマッカーシズムや奴隷制についての項目の過剰な取り扱いを問題視している。(Johnson & Avery, 1999, p459)。Johnson & Avery は次のように当時を振り返っている。

新聞諸紙はスタンダードの持つ自発的な性質を見落とし、結果として伝統的にアメリカが恐れている学校カリキュラムの国家統制を導いた。さらに、新聞において歴史スタンダードは(カリキュラムとしてではなく)歴史として扱われ、また同時に合衆国史に挑戦するものとして表現され、多文化主義や歴史的修正主義に対する過剰な反応が後に醸成されることになった (Johnson & Avery, 1999, p463)。

このような空気のなか、1995年1月12日、National Center for History in the Schools が合衆国史スタンダードの見直しに同意すると、18日には議会によって歴史スタンダードに対する糾弾が99対1で可決された。1994年版歴史スタンダード批判は、ネイティブ・アメリカンやアジア系移民、黒人の歴史にも言及することによってナショナル・アイデンティティが多様化することへの嫌悪感が表出した。カリキュラム改訂によって WASP 中心の米国史観・知識の復権が行われた。それは、多様な解釈を認めるものではなく子どもたちはこうした知識に対して疑問をもつことはできずニューヨークの社会科カリキュラム改訂と同様に、伝統主義の復活

といえる。

アメリカは2001年に発表された「No Child Left Behind」政策によって、スタンダードに基づいた教育改革を推進してきた。その結果、多くの学校では伝統主義の授業スタイルに回帰せざるを得ず、その内容もスタンダードやテストに合わせたものとなっている。そこには、多様な解釈や価値は許されず、正解はただ一つに限定される。60年代のポストモダンによる教育批判からはじまったレリバンス運動は、「国家の危機 (Nation at Risk)」を招いたとされ、80年代後半から90年代の論争を経て、伝統主義への回帰へと進んだのである。

参考文献

- Banks, James A. 1994 *An Introduction to Multicultural Education*, Allyn and Bacon=1996 平沢安政訳、『多文化教育 新しい時代の学校づくり』,サイマル出版会
- Behar-Horenstein, Linda S. 2000 Can the Modern View of Curriculum Be Refined by Postmodern Criticism? "Paradigm Debates in Curriculum and Supervision", Bergin & Garvey
- Bernstein, Basil 1973 *Social Class, Language and Socialisation, Current Trend in Linguistics, Volume 12*, Mouton=1980 佐藤智美訳,「社会階級・言語・社会化」,『教育と社会変動』,東京大学出版会
- Bowles, Samuel 1971 *Unequal Education and the Reproduction of the Social Division of Labor, Review of Radical Political Economics 3 (Fall 1971)* =1980 早川操訳,「教育の不平等と社会的分業の再生産」,『教育と社会変動』(上),東京大学出版会
- Bowles, Samuel & Gintis, Herbert 1976 *Schooling in Capitalist America -Educational Reform and Contradictions of Economic Life*, Basic books=1987 宇沢弘文訳『アメリカ資本主義と学校教育 教育改革と経済制度の矛盾』(I・II),岩波書店
- Dewey, John 1915 *The School and Society*, Revised Edition, The University of Chicago Press. =1957 宮原誠一訳,『学校と社会』,岩波文庫
- 1916 *Democracy and Education*, The Macmillan
- 1964 *My Pedagogic Creed*, Random House, New York
- Gitlin, Todd 1987 *The Sixties: Years of Hope, Days of Rage*, Roberta Pryor, Inc.=1993 足田三良・向井俊二訳,『60年代アメリカ 希望と怒りの日々』,溪流社
- 堀 和郎 1976 「アメリカ教育委員会制度の成立とその観念的基礎」,『教育学研究』,第43巻,第1号,日本教育学会,24-33
- Johnson, Theresa & Avery, Patricia G. 1999 The Power of the Press: A Content and Discourse Analysis of the United States History Standards as Presented in Selected Newspapers, *Theory and Research in Social Education*, Volume 27, Number 4, Fall 1999,447-471

- Karabel, Jerome & Halsey A. H. 1977 *Educational Research : A Review and an Interpretation, "Power and Ideology in Education"* New York : Oxford University Press.=1980 潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳,「教育社会学のパラダイム展開」,『教育と社会変動』(上),東京大学出版会,1-95
- 桐谷 正信 1997 「アメリカ多文化的歴史教育における「新しい社会史」の位置と価値 ニューヨーク州歴史シラバスの分析を手がかりに」,『社会科教育研究』,第 78 号,日本社会科教育学会,1-13
- 1999 「ニューヨーク州社会科フレームワークにおける多文化的歴史教育—「多様性」と「統一性」を中心にして—」,『埼玉大学紀要教育学部(人文・社会科学)』,48(1),1-13
- 2000 「歴史カリキュラムにおける「多様性」と「統一性」 ニューヨーク州合衆国史カリキュラム改訂を事例にして」,『社会科研究』,第 53 号,全国社会科教育学会,43-52
- 森茂 岳雄 1996 「ニューヨーク州の社会科カリキュラム改訂をめぐる多文化主義論争 A. シュレジンガー,Jr.の批判意見の検討を中心に」,『社会科教育研究』,No.76,日本社会科教育学会,13-24,『アメリカ多元文化社会における国民統合と教育に関する史的研究』,アメリカ教育史研究会,269-280
- 1999a 「アメリカにおける国民統合と日系人学習 多文化教育としての日系人学習の意義」『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』,明石書店
- 1999b 「アメリカの歴史教育における国民統合と多文化主義」,『多文化主義のアメリカ 揺らぐナショナル・アイデンティティ』,油井大三郎・遠藤康生編,東京大学出版会
- 森田 尚人 1979 「学校における愛国心の教育 アメリカ建国期における国民統合と教育」,『現代教育問題史 西洋の試みとの対話を求めて』,松島編,明玄書房,303-322
- 森田 真樹 1995 「アメリカ合衆国における教育改革と社会科系ナショナル・スタンダードの成立」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』,第 41 巻,第 1 部,489-494
- 1996 「米国におけるナショナル・スタンダードをめぐる論争」,中国四国教育学会編『教育学研究紀要』,第 42 巻
- 1997 「多文化社会米国における歴史カリキュラム開発 合衆国史ナショナル・スタンダードをめぐる論争を手がかりに」,『カリキュラム研究』,第 6 号,日本カリキュラム学会,41-52
- National Center for History in the Schools 1994 *National Standards for United States History: Exploring the American Experience*, University of California
- National Center for History in the Schools 1994 *National Standards for World History: Exploring Paths to the Present*, University of California
- National Center for History in the Schools 1996 *National Standards for History Revised Edition*, University of California

- National Council for the Social Studies 1994 *Curriculum Standards for Social Studies, Expectations of Excellence*, NCSS Publications
- 佐藤 学 1990 『米国カリキュラム改造史研究 単元学習の創造』, 東京大学出版会
- 1996 『カリキュラムの批評 公共性の再構築へ』, 世織書房
- Schulesinger Jr., Arthur M. 1991 *The Disuniting of America*, Whittle Books=1992 都留重人
訳『アメリカの分裂 多元文化社会についての所見』, 岩波書店
- Silberman, Charles E. 1970 *Crisis in the Classroom*, Random House=1973 山本正訳『教室の
危機 学校教育の全面的再検討』(上・下), サイマル出版会
- Woodward, Patricia 1996 *The Teacher's Almanac 2nd edition -The Professional Teacher's
Handbook*, Lowell House
- 山田 史郎 1982 「レオナルド・コヴェロと移民の教育 20 世紀前半ニューヨーク市のイタ
リア系コミュニティ」, 『西洋史学』, 127, 日本西洋史学会, 37-49
- 1990 「移民のための教育、地域のための学校 あるイタリア系アメリカ人教師
の試み」, 『規範としての文化 文化統合の近代史』, 平凡社
- 1998 「ホワイ・エスニックへの道 ヨーロッパ移民のアメリカ化」, 『近代
ヨーロッパの探求① 移民』, ミネルヴァ書房

注

- i クリバードによると、当時のアメリカは工業国家へと転換する中で、地域の組織体の性格を
改革改造する必要性に迫られていた。南欧や東欧から押し寄せる移民のアメリカ化という課題
のためである。こうした中、1890 年代 W.T.ハリスが教育長官に就任し教育におけるイデオロ
ギー論争が高まった。論争がある程度の決着をみると、全米教育協会 (NEA) の主導のもと、
ハリスや C.W.エリオットらによってカリキュラム改革を進めるための「10 人委員会」が組織
された。こうしたことや社会的背景を総合することによって、1890 年代をカリキュラム開発の
出発点と置くことができるのである。
- ii 社会効率的なカリキュラムの特徴は、教育が 20 年間の青少年時代のためのものではなくそ
の後にくる成人生活に対する準備である点、特定の社会的・職業的役割を学習者に確
実に与えていく点と考える点にある (Klieberd, 1979=加藤幸次訳「アメリカ教育課程研
究」, p126)。これはボビットが産業界で追求されていた「効率 efficiency」という概念を、カ
リキュラムにおける効率に当てはめたことに始まる。つまり、F.W.テイラーの示した科学的管
理運動の考えをカリキュラムの作成に適用させたのである。科学的な管理運動そのものは、産
業界において F.W.テイラーによって当時すでに始められており、この運動は科学的な正確さが産
業における効率を高めるものである、という仮説に則っていた。
- iii 社会効率主義の特徴に対してデューイは、「教育は生活の過程であり、将来への生活の準備
ではない (J.Dewey, 1964, p430)」、効率だけを課題にした職業教育は「技術革新に適応して行
く能力を失うはずである (J.Dewey, 1916, p140)」と批判し、子どもの生活を大人のそれと比べ
劣るものではなく、「子ども自身が生活すべきである (J.Dewey, 1915=宮原誠一訳, 『学校と社
会』, p67)」とした。
- iv 社会改造主義は進歩主義教育協会の教育学者たちが、ソビエトスターリン主義の教育計画の
影響を受けて、大恐慌の時代に推進した教育改革の系譜であり、そこでは現実社会の問題を批
判的思考によって解決する能力が追求された (佐藤学, 1996, p10)。この運動の同調者として、
社会科の教科書において広くその思想が採用された H.ラッグが挙げられる。
- v 社会適応主義は、社会効率主義の再興ともいえる。クリバードは、連邦教育局の会議におい
て、将来進む方向に応じて学生を分割する職業教育のためのプログラムと同時に生活適応教育

(life adjustment training) を与えるべきだという考えを述べた。この考えは、犯罪の減少や雇用の促進、忠実な国民の育成、職業準備の付与という政府の関心と一致した。

vi National Center for History in the Schools. 1994 *A nation at risk: The imperatives for educational reform*. この報告書は、当時のベル教育省長官が 1981 年に設置した「教育の優秀性に関する全米審議会」による、アメリカ全土の教育の質にかんする調査結果である。冒頭に「わが国は危機に直面している。かつては商業、工業、科学、技術革新において他の追随を許さなかったわれわれの優位も、いまや世界中で多くの競争者に奪われようとしている」と、日本などの工業国によって脅かされようとしている現状への憂慮が示されている。さらに、アメリカの非識字率の高さや学力水準の低下傾向を危惧し、5つの教育改革提案を行っている。その内容は、1 高校卒業要件（内容）の強化、2 教育の基準を測定可能なものにし、教育に対する期待感を高めること、3 授業時間数の増加、4 教員の改善、5 教育改革への指導と財政援助である。

vii Coleman, James S., et al. *Equality of Educational Opportunity*. Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1996.

viii カリキュラムのモダニズム的な特質は「1. 学校のあり方への公共的な観点、2. 親の記憶から提議される学校教育、3. 生産的な市民育成という社会的期待、4. 標準テスト

(standardized test) の実施、5. 生徒の成果に対する教師の結果責任、6. 学校を工場として描く喩え、7. 選別された最も価値のある知識」にある(Behar・Horenstein, 2000, p6)。ここから、全体として矯正装置の役割をもったモダニズム的性格を認めることができ、価値の多元性を認めるものではないことが分かる。

ix 佐藤はカリキュラム概念を「実践」→「批評」→「開発」(佐藤学, 1996, p18)の様式を導入することによって再定義しようとしている。

x ポストモダニズムによる学校批判をベアール・ホーレンシュタインは次のように提起する。

「1. 期待されない階級や地位の生徒たちに対して平等な機会を約束しない、2. 支配階級の知識や価値を高める、3. 当該実行者の政治的経済的实践で飽和状態にさせる、4. テイラーの理論的解釈への過剰な信頼、5. 生徒のニーズ、アイデンティティ、人間性の抑圧、6. 無視・周辺化される集団の存在、7. 文化的多元性・文脈・舞台を認める知識の必要性がある」(Behar・Horenstein, 2000, p6・7)である。ポストモダニズムによる学校批判から分かることは、カリキュラムを支えてきた教育は公共性や特定の文化集団のためのものであり、他の文化集団にとっては「負」の烙印を押される場であったことが初めて認識されたのである。結果として、ポストモダニズムの学校批判は、モダニズムのカリキュラムの中に価値の多元化を目標とする多文化教育を取り入れさせた。

xi コヴェロ氏の回顧について一文を挙げると、次のようなものである。「初等学校時代全体をとおして、私はイタリアのことやイタリア語について、また有名なイタリア人が世界で何を行ったかについて何一つ語られた記憶がない——コロンブスを除けば。我われはすぐに「イタリアン」ということが何か劣ったものであると考え始め、それでイタリア系の子どもとその親の間に障害ができてしまった。我われは、親をいかに恥じるべきかを学ぶことによって、アメリカ人になっていったのである。」(山田, 1982, p183)

xii Paul Revere (1735-1818) アメリカ独立戦争時の愛国者。1775 年 4 月 18 日夜を徹して馬をとばし、イギリス軍の進撃をいち早くレキシントンの人々に知らせた話で有名な人物。ボストンに多くの足跡が残されており、野外の教育活動にも使われている。

xiii Harriet Tubman, (1820-1913) アメリカの奴隷解放活動家。メリーランド州の農場の奴隷であったが、逃亡して奴隷制廃止運動に献身した。地下組織を通じて 300 名以上を北部に逃がす手助けをした。

Defining Critic of Multiculturalism in American Curriculum Reforms —Analysis for the Controversy about New York Social Studies Curriculum—

Tomomi Kawakami

This paper discussed about the stream of American Curriculum Reforms from 1890s until today, as it was repeated on a rotating basis between Traditional Education and Progressive Education. I would define the standard based reform we are faced now, through examining the controversy about New York City Social Studies Curriculum.

Traditionally, the mission for public education was owed for newcomers to create national identity as American, which placed the great value at democracy and freedom founder of a country had gained. To create national identity was suitable for the school functions in terms of modernization and assimilation. Also, Social Studies Curriculum had begun to set for development of democratic notion in 1890s; therefore social studies have a great role for government. But such a curriculum perspective had a disadvantage for students, because students had to think the right way indicated in curricula. After the traditional assimilative education had operated for a while, the other side had begun to create the new curricula called progressive pedagogy.

After 1960s, post-modernism critics disputed that minority students have disadvantages in New Curriculum Movement that had set after Sputnik shock, because its knowledge, culture and school curriculum had an affinity to white culture, especially for WASP. Relevance movement that started in late of 1960s has multicultural view for minority students and ethnic diversity. As the same time that "Nation at Risk" was published in 1980s, people had started to accused 1980s multicultural curricula for its diversity and tendency of declining academic standards. In New York State, the Board of Education had prepared the framework for subjects to raise the standard, but it brought the controversy about the multicultural view for ethnic minorities.

That controversy showed us that curriculum reform was the phenomena of revival of modernization and assimilation for newcomers, and traditional pedagogy has come back to the classroom. We can recognize the traditional influence in a standardized test, didactic pedagogy and clam education now in New York City public schools. I examined the tendency to emphasis on the value of Western culture and those shifts in the revision of New York State Social Studies Curriculum and the National Standard for history.